



都市空間を構築する  
権力の諸相を、歴史都市  
京阪神を舞台に地図と  
景観のなかに読み解く

ナカニシヤ出版 定価：本体2800円+税

まちとして大正時代に一挙に市街化したすがたであると、本書から教えられた（六五・六八頁）。

この本は、大阪市立大学のテキストであり、「序章」には、「わたしたち著者の願い」として、「景観のなまかにはつきりと刻み込まれている」「都市の空間―社会を構制する営為や諸力」、「その痕跡をまずは『図』から読み取り、そして実際の『地』を自ら歩き、都市形成の過程を学び取つてほしい」と書かれている（二頁）。

とはいっても、決して難しい教材ではなく、豊富な地図・写真、新聞記事など、多くの資料が用意されている。本書は、まさに「モダン都市の系譜」である。

ところで、一昨年から小生は大阪ボランティア協会の「体験！ フィールドワーク市民塾」を手伝いはじめ、これまでに大正・天神橋筋商店街・砲兵工廠跡・野田・釜ヶ崎・中之島・平野を訪ねた。地図を手に地図の方をガイドに歩いてみると、何気なく通り過ぎてきた、あるいはまったく知らないかった、そのまちの歴史や課題が理解できるだけでなく、なぜか親しみが湧いてくるから

や小説の引用が、小生のような一般の読者をも楽しませてくれる。だが、あくまでも著者たちの意図は、最終章が「大都市の光と影」とされているように、いわゆる都市問題がどこに存在するかを、歴史的・社会的・空間的に明らかにすることにあると考える。したがって、となる読み物ではなく、読者一人ひとりに困難な課題の解決を考えさせる、読みごたえ十分な本といえよう。

さて、この本の著者の一人、水内さんは、さらに論文「貧困現象を空間的視点からとらえると見えるもの」（『貧困研究』第一号、明石書店、二〇〇八年一〇月刊）を書かれた。小生のような地区担当の生活保護ケースワーカーには、地域の特性から施策をどうつくるべきか、一読して目が覚める心地がした。

加藤さんもまた、著書『大阪のスマートと盛り場』（創元社、二〇〇二年四月刊）で、釜ヶ崎・黒門市場・千日前・飛田など、ミナミのまちが明治半ばから昭和初めにどう形成されたかを、歴史的に追究されてい

る。また、『市政研究』は、二〇〇六年冬・第一五〇号で「大阪の社会地図」を特集している。これらの書籍も、ぜひあわせて読まれるよう勧めたい。

## 図書紹介

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著

### 『モダン都市の系譜』

— 地図から読み解く社会と空間 —

ナカニシヤ出版 二二八〇〇円

待ち望んでいた本をついに読むことができた。

かつて『東京の空間人類学』（陣内秀信著、一九八五年刊、現在はちくま学芸文庫）という書物を読んだときから、ずっと大阪のまちを歴史的、空間的に描いた本を切望してきたが、念願がかなつたのである。これに勝る喜びはない。

さて、この本の構想は、「あとがき」によると、水内さんが取り組まれた大阪市立大学のシンポジウム、「大阪環状線文化論——インナーリティからの文化発信・まちづくり」（一九九六年）から生まれた。すな

わち「鶴橋、新今宮、大正、そして福島から、在日、日雇労働者、沖縄、元の方々にそれぞれ講演をしていただき、「都心部周縁のインナーリングに着目してモダン都市の系譜を地図から読み解こうとした」という。

このように前近代から現代までを時代順にたどりながら、大阪・京都・神戸の三大都市の成り立ちが詳細に分析されている。

まず、本書の構成を紹介しよう。  
「第I部 近代都市空間の成立」「第1章 前近代都市・城下町」「第2章 城下町の明治・近代都市への変貌」「第3章 三都のインナーリング・都市計画の暗黒時代と言われるなかで」

小生が住む福島区の西部には、戦災を免れた長屋と路地のまちが広がっている。その景観は、かつての水田地帯が六大工場に働く労働者の

「第II部 モダン都市」「第4章 郊外の誕生とその発展」「第5章 都市計画と社会政策の時代」「第6章 モダン都市の賑わい・盛り場化する商店街」「第7章 戦時の都市建設・意図せざる近代化」「第8章 建物疎開・空襲・戦災復興」「第III部 戦災と復興」「第IV部 高度成長と現代の都市空間」「第9章 バラック／スラムと住宅要求運動」「第10章 スプロール・団地・インナーシティ問題」「第11章 大都市の光と影」

京都市伏見福祉事務所

正木敦士